

2. 倉田直道（都市・建築デザイン）／工学院大学教授（2002年4月29日）

伊藤 財団法人社会安全財団から、委託研究ということで、都市・社会の安全に関する基礎的研究として、去年と今年度、できれば来年の三年間で、一つのまとめをしようということになりまして、初年度はまず市民の意識、現状をまず調査しています。で、その中に、一応、市民だけでなく、専門家の先生方数名にそれぞれの専門の立場から色々な経験、社会・都市の安全に関して、今お考えになっていることをヒアリングしている、という状況で、今日は倉田先生にも3~40分くらい、今の考えをお答えいただきたいと思っています。そこでまず、日本は安全な国というふうにお考えになっているかどうか、過去から今までも良いですでお聞かせください。

倉田 相対的に、日常的な感覚としては、かなり安全な国であろうというのは、ほかの国へ行ってみれば感じることであります。それはあくまでも、日常の環境として生活する上でそういうことを感じるかということ言えば、どちらかという社会的な要素が多いかな、というふうに感じています。それ以外の災害とか、他の安全に関する要素についてはやはり、そこに生活していないと、比較の上でどうかということとはなかなか言いにくいような気がします。ただ、もう一つ、これも一般的な認識になってしまうかもしれないですけど、日本は地震国であるとか、そういう点で言えば、震災に対しての危険性というものはあるのかなと思います。震災についての意識というのは、阪神淡路の震災の時には強く実感しましたね。基本的に安全かどうかということと言うと、時間的に見ると、一般の生活者としてはやはり、社会的な安全性についての犯罪者や都市の犯罪、そういうものは増えてきていることは実感します。それは新聞上でもそうですし、私自身ということだけでなく、比較的近いところで、そういうことに遭遇するっていうことも増えている、そういう感じがしますね。

伊藤 もう一つお配りした資料の方で、一般の方々の意識調査ということで、こういうアンケートをお配りして、今、回収しているところなのですが、一番初めは本人の属性、二番目に社会安全についての意識ということで、こういった8項目のことを挙げて聞いています。次のCのところでは、実際に昨年一年間で発生した、いわゆる凶悪事件と言われているものを、みなさんがどのくらいご存知かで、それに対して具体的に自分の行動をどう変えたとか、そういったことを聞いています。昨年はずね、テロという大きなインパクトがありましたので、これを別に聞いた方が良さだろうということで、一番最後のDのところでは、テロに関する質問を特に2、3問している状況です。まず、今お聞きしたところ、自然災害的なもの、それから犯罪的なもの、こういった安全に対する意識のほかにも、例えばここにありますような教育問題、近隣環境、技術的なもの、環境問題といったところに関しては、倉田先生が色々見てきた国、暮らした感じなど、そういうことを比べてみたとき、どうお考えになりますか。

倉田 個人的に環境の問題というのはすごく気になっていまして、震災とは少し違う意味でですね、地球規模の環境問題としてのCO₂、それから地球の温暖化など、すべて地球環境に関わる問題というのは、やはり個々の国の問題としてではなく、かなり厳しい状況にあるのではないかと思います。特にどのくらい実感を持っているかということになると、日常的にそれを強く感じているかということ、異常気象とかそういった中でそのようなことを感じていることになるかもしれませんが、そういう意味で、かなり我々の生活している身近な環境というよりは、地球規模の環境が大きく変化しているということについて言えば、これから我々はそうとう真剣に取り組んでいかなければならない問題ではないかと、強く感じます。別の意味で言いますと、交通事故ってこととは違いますけど、そういうことも含めて、大気汚染の問題などの、とにかくありとあらゆる地球環境が、人間が生活できる形で維持していくためには、相当な努力が要るのではないかと実感していることは確かですね。それから、教育問題に関して、近隣問題も含めて、どちらが原因でどちらが結果っていうことは判断しにくいかもしれませんが、やはり色々なコミュニティというものが色々ところで崩壊というか、コミュニティの関係が質的に変わってきている中で、やはり、人間関係がある意味で、法律とか犯罪などの社会の制度として安全にかかわる問題について、それ自体は抑制する働きを持つというだけではなく、コミュニティが果たしてきた役割というものは非常に大きかったと思います。そういうところでやはり、本来の日本の社会、あるいはアジア的な社会で成り立ってきて、そういったものが実はかなり補完した部分があったと思うのだけれども、それがかなり大きく変容してきているということでは、これはもう、それが安全にどのように関わってくるかという問題だけではなく、それもその一つの表れだと思っておりますけれども、そういう意味ではすごくその問題は

きいな、というのは、新聞紙上などを見ていると強く感じることです。あともう一つ、情報化の問題のなかで、非常にバーチャルな世界というのは、人間関係に関連してくるのかもしれないのですが、やはり、フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションだけでなく、バーチャルな世界での人のつながりみたいなものが、かなり拡大していつているというのを、特に若い人たちの中で感じて、ある種、広い意味でモラルの問題などのことで、我々が予期していない問題が、今後どんどん発生してくるのではないのかなというのは、強く感じます。

伊藤 そうしますと、今色々とお話いただいた中で、ひとつの時間軸で捉えると、日本は比較的世界に比べて安全だったのだけれども、やはり、過去と今とを比べると、安全に対するさまざまな脅威という点から言うと、悪化しているということですね。これがたとえば、今後どうなるのかとお考えになったとき、果して今の状態というのは、もっと悪くなるときの過渡期なのか、それとも良くなるのか、もしくは、ここでこの現状維持で止められるのか。たとえばアメリカの先例などを見ますと、私は個人的に、今はまだ中間段階だと思っております。ある程度、行くところまでいってしまうのではないかと。特に犯罪の凶悪化みたいなものもあるし、そんな感じがするのですけれども、先生はどうお考えになりますか。

倉田 そうですね。犯罪のことに関して言えば、そういうふうに感じているし、今の状態が一番ひどい状態だっていうふうには思っていないで、まだまだこういう状態がどんどん続いていくし、さらに状況としてはひどくなっていくと感じていますね。とにかく、少なくともそれは歯止めがかかるような要素っていうのは少ないように思うし、先ほど言った環境問題でも同じだし、そういう犯罪とかそういうことについてみても、逆に言えばその犯罪をさらに凶悪化していく、あるいはその犯罪自体が非常に多様化していくような状況というのは、続くと思います。特にその要因というのが、全く排除されていない時にはそうなるだろうと。犯罪についても、私自身が少し顕著だなと思っている部分というのは、その犯罪の低年齢化のようなもの、特に教育とか、逆に言えば社会から子供たちがはじき出されている部分というものもあるし、家庭でもそうかもしれないです。そういう意味で、子供の問題、少なくとも青少年の犯罪というのはさらに続くだろうと思うし、今後まだ、日本は今以上に国際化が進み、海外からの外国人居住者、それがまだまだ増える状況にあるとすれば、それは量的に増えること自体がイコールとは思わないけれども、日本的な社会、日本のそういう西洋的な枠組みというものに対して、まだ馴染んでない人たちとか、コミュニティ間の問題とか、色々な意味で、そういうものに入って来られない外国人、不法滞在の外国人というのはもちろん当然だと思うのだけれど、それ以外にもさまざまな犯罪につながっていく要素というのは、増えてはいるのだけれども、減る要素はない、そういう感じは強くなります。とにかく、さきほど話した、ITとか人のコミュニケーションを変えていく、演出させていくさまざまな要素が非常にあるので、そういう中から色々な犯罪につながっていくというのは大いにあるのかなと思います。

伊藤 確かに外国人は多分、今後は日本人自体が高齢化していくので、労働人口の面から見ても、外国人はある程度入れていかなければ成り立たなくなっていると思うのです。そういう中で今、法律もあまりきちっとされていないので、入ってきた外国人がきちっと働けないとか、子供が学校に行けなくて、犯罪を誘発して、将来的にそういったところに入ってしまうようになっていくということがよく言われているのですけれども、例えばこのままの状況で何もしなければ、犯罪然り環境然り、そういったコミュニケーションのような面もどんどん、おそろかというか、悪くなっていくというお話だったと思うのですけれども、そうしますと先生ご専門の都市計画のなかで、これ以上、悪くならないようにというか、逆に言えば悪くなっていくのはわかっているとすれば、それに対してどのようなことが街づくりでできるのか、ということに関してはいかがですか。

倉田 都市計画でできることっていうのは限られているとは思いますがね。特にその外国人の問題ということで言えば、それはもう少し法整備が色々な意味で外国人を受け入れるということを前提に、外国人にとっての権利の問題も含めて、俗に言うノーマライゼーションというような社会的なところでも、かなり法整備が必要じゃないかという気はしますね。そういった中でやはり、きちっと日本的な日本の社会に入ってきてこれ人間と、社会的な枠組みの中でも、そこに入ってきてこれられない、色々安全を脅かす可能性のある外国人もいて、結果としてそうならざるを得ないという計算があるとすれば、そういうものはかなり排除されるのだろうと思うのだけれども……。まちづくりの点で言うと、以前まちづくりにおける国際化という問題を、神奈川県調査研究会で二年くらいやったことがあるのですけれども、そのときに、当初は国際化の問題というのは、単に色々なサインの表示やそれに近いような話がほとんどだったけれども、最終

的にその議論が行き着いた先というのは、やはりノーライゼーションというか、外国人もやはり日本の社会の中である程度人間としての権力を行使できるというか、逆にその結果としての義務も発生するという形を作っていないと難しいだろうということは、そのときにはもうありましたね。そういうことでいうと、ハードなまちづくりというのも、ある部分は、果たせる役割はあるとは思いますが、特に犯罪とか社会的な安全性ということで言えばあるとは思いますが、例えばそれはハードな問題で言えば、アメリカでもディフェンシブ・スペースとかいうようなことで、オスカー・ニューマンとか、パークレーですとクーパー・マーカスなどというのは、ハードな意味で、そういう住宅地の作り方とか、犯罪をある程度抑制できるような環境作りというのも実際には議論されているし、それが研究成果としても挙げられているのだけれども、やはりどちらかという、僕はそれ以上にまちづくりであれば、少々ソフトな部分、広く言えば市民参加を通してまちづくり自体が一つの手段として、コミュニティ自体が再生されていく。そういうことが結果として社会的な安全性を増すひとつのきっかけにはなるのではないかと思います。それは教育の問題もそうかもしれないし、近隣の問題もそうだと思いますし、古い昔の村型のコミュニティがどうかというのはあるかもしれないけど、やはりもう一度、コミュニティの問題というものが、まちづくりを通してきちっと再評価されていかなければいけないのではないかと、という気がしています。

伊藤 そういったソフトによる、安全な社会づくりというのは、ある意味で対立しているのですけれども、最近の東京都の例で、石原都知事が登場してから、例えば強い防災システムということで、自衛隊も含め、そういう活動とか、シミュレーションをやってみるとか、あとは歌舞伎町にカメラをつけて防犯に役立てるとか、それから、警察の人数を東京都は増やすとか、遊休地に留置所をつくるとか、ああいった公権力というか、公権力によるより厳しい警備システムとか防災システムとか、そういったことがやはり、都市に住む人間を守るためには必要なのだという考え方が、東京から始まっているような気がするのですけれども、これに対してはどうお考えになりますか。

倉田 結果としてはバランスの問題だと思うのですけれども、それは全くなくてよいかと言われると、否定しきれないという気はしますけれども、個人的に都市の健全なありかたとしては、理想あるいは目標といういいのかもしれないですけど、できるだけ公権力の力で押さえつけるというか、コミュニティのかなり内発的な力でそういう環境を作るということが理想であるとは思いますが、ただその際に、全くそういうものの持っている抑止力がないかというところではないし、ただ、怖いのはそういうものの力が過大評価されて、どんどんそれが拡大していく状況というのは、非常に怖い気はしますね。やはりその先にあるものを色々考えると、それはもう極力最小限のものにしたいなと思います。ただ、現実には起きているものに対して、それがすぐ、公権力の持っている力でなく、地域の持っている内発的なコミュニティの力で、それを全てなくすることができるかというところではないと思うので、その辺は慎重に議論しなければいけないと思いますが、必要なものはやはりその場合も残ってくると思います。けれど、例えば、自衛隊のそういう出動の話とか、あるいは、歌舞伎町にカメラを設置するとかという間にはかなりいくつかの選択肢があるし、歌舞伎町にそういうものを設置するというところ、ある程度抑止力が働くということは認めざるを得ないし、その辺は非常に微妙な気はします。実際、歌舞伎町の話がでてから、僕がかかっている町でもそういうものを導入する必要があるのではないかと、という議論がやはり出ていますので、そういう点では、かなり幅はあると思うのですけれども、全くそれがゼロでいいかというところ、そこまで楽観的にはなれないというか……。

伊藤 歌舞伎町のカメラは警察がやっているのですけれども、例えば横浜の伊勢崎モールなどは、商店会がやっていますね。私もああいう形だったら……。

倉田 実際その違いというのは非常に大きいと思うのです。だから、僕がいま関わっているところの議論というのは、横浜に近いです。地元の商店街の振興組合が、そういうことを考えようと。自由ヶ丘なので、けれども、実際に、いわゆる自警団のような、大げさなことを言えば、地元の商店街の人たちが夜回りの形で進めている活動もありまして。パックスと書いていますね。そういう活動の延長として、実際パックスというのも人海戦術なので……。

伊藤 パックスというのはどういう綴りを……。

倉田 PACKS と書いてあるのだけれども、どういうところできたのかな。

谷 何かの略じゃないですかね。

伊藤 ガーディアン・エンジェルスの手本みたいなものですよ。